

それでは、表題にあるとおり、「障害者福祉における本人中心の支援計画とは」というテーマで、お話をいたします。なお、このタイトルの下にサブタイトルでですね、「パースン・センタード・プランニング」。横文字が書かれていますけれども、その理由については、これからお話の中で説明しますので、よろしくお願いいたします。

1番目のスライドに移ります。ここに書かれている、「本人中心の支援計画」というタイトルのスライドですけれども、この中に、これからお話するベースといわれるもの、いえるものが含まれております。非常に単純なことなんですけれども、大切なことなので、この説明から入りたいと思います。

で、「本人のリアル・ニーズを中心に据えた支援計画」というふうになってます。本人中心。すなわちリアル・ニーズを中心に据えたと言い換えても言いわけなんですけれども、このリアル・ニーズというのが何かといいますと、ご本人が望んでいる暮らしを実現するために必要なこと、というふうに言い換えることもできます。ご本人が望んでいる暮らしを実現するために必要なこと。

それでは、それをどういうふうに把握していくか、捉えていくかということですが、1番目。本人の発した言葉だけでなく、表情、行動などから読み取るっていうふうに書かれています。ちょっと考えてみていただきたいんですけども、私たちも例えば何かを頼まれたときに、嫌だとか、やりたくない、はっきり意思表示をする場合もあれば、う～ん、ちょっと困った表情をする場合もありますよね。それから、その場からちょっと忙しいん、というようなことで、立ち去ることもあるかと思います。いろんな表し方を、その嫌だとかやりたくないを表すとしてるわけですね。したがって障害のある方も、意思表示が苦手なことが多々あるわけなんですけれども、実はいろいろな表出の仕方をしています。それを読み取ることが大切ですよということが、1つめに述べられていることです。

2つめ。家族の願いそのものが、本人の望むこととは限らない。これもですね、よく障害を持つお子さんの親御さんの、まあ、この子はね、こういう子だから、こういうふうにしてほしいってというようなことを頼まれたり、あるいは、こういうことをさせないでください、って頼まれたりすることもあるかと思うんです。そうすると、いや、これ本人中心の計画を立てなきゃいけないから、家族の願いというものは無視して、本人から聞き取るんだ。こう短絡的に考えていいかという、そうではないと思うんです。親御さんっていうのは子どもさんの将来を考えたり、あるいは自分の将来を思い、将来のことを思い巡らして、子どもさんのことを語ることがあるっていうのは当然のことです。家族あるいは親の思いを否定するのではなくて、その困り感っていうものを受け止めたり、あるいはその方の健康状態、あるいは経済状態、あるいはその親御さんが介護が必要になっている、そういう

世代かもしれない。そういうことを把握した上で、その状態に寄り添っていくということがとても大事です。そうした上で、子の主体性、子どもさんの主体性を尊重するスタンスに立つと。単純に親御さんなり家族を無視するということではなくて、家族の方も受け止める。寄り添うということをしつつ、ご本人の望む暮らしっていうものを追求していく。それが大事だと思います。

3番目に書いてあることは、そこに近づくために、本人の望む暮らしというものに近づくために、支援者はインタラクティブなプロセス、対話によるプロセスを通じて近づくことができるというふうに書いてあります。なぜこのように書いてあるか。支援者の聞き取りを通じて近づくでも、いいではないかというふうに言えるかもしれません。支援者がその向き合っている障害のある方に聞き取りをする。ニーズを追求するために、明らかにするために。しかし、そのときに障害のある人に接する姿勢とか態度。支援者の姿勢とか態度はどうでもいいのかっていうことになります。そうではない。実は、相互作用が働く。例えば、支援者が語っている。その態度が障害のある人から観察される。評価される。あるいは、それによって反応しているっていうことがあるわけなんです。あくまで支援者はその態度とか姿勢を聞くという姿勢と、それから自分もそれに寄り添うという姿勢を持っていなければいけない。まあ対等性というふうに言ってもいいかもしれません。お仕事としてやるんだけれども、そこには対等な関係。つまり自分もそこで影響される。相手にも自分たちが影響しているっていうことを理解しながら、そのやりとりをしていくっていうことがとても大事なことになります。